

とき の す 時ノ寿の森通信

<http://outdoor.geocities.jp/tokinosunomori>

E-mail: tokinosunomori@yahoo.co.jp

<連絡先>掛川市中宿 1 1 3 (TEL・FAX 0537-23-0412) 「森の駅 時ノ寿」(TEL 0537-28-0082)

第 15 号

2010. 10. 1 発行 (秋号)

NPO 法人 時ノ寿の森クラブ

<通信あらたな出発にあたって>

今年の夏の猛暑は、人間だけでなくすべての生物にとってダメージが大きく、将来に不安を感じられたことと思います。ようやく朝晩は秋の深まりを感じざる今日この頃ですが、まだ日中は暑さが残ります。このような気候の変わり目には体調を崩しやすいので、会員の皆様、くれぐれもご自愛ください。

さて、NPO法人としてあらたなスタートを切り半年が経過いたしました。現在 125 名 1 団体の方々にご入会いただき、多くの皆様のご尽力により、ふるさとの森を豊かに保全する活動が展開できております。植物生態学者・宮脇昭先生も「愛する人のために木を植えてください」とおっしゃっています。私たちの「未来の子どもたちに引き継ぐいのちの森づくり」は、始まったばかりです。息の長い森林再生の活動に、今後ともご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

しばらく休刊していましたが、会員の皆様と時ノ寿の森をつなぐ大切なパイプとして発行を再開いたします。ホームページは、日々更新に努力して参りますが、通信は季刊で年間 4 回程度発行したいと思っております。会員の皆様のお声も掲載したいと思っておりますので、感想やご意見、提案などをお気軽にお寄せいただければ幸いです。

理事長 松浦成夫

<秋号もくじ>

参加者募集！ COP10 開催記念・自然観察会	2
時ノ寿の森に陶芸窯を造る！	3
内閣府「地域社会雇用創造事業」受入	4
最近の「時ノ寿ホームページ・ブログ」より	
10/3 林業はいのちの森づくり	5
9/23 いのちの森づくり 40 年	5
9/16 木は夢の種だ	6
9/14 組織活性化に間伐材がー役	7
9/12 北海道の会員より大地の恵み届く	7
9/9 外資による森林買収が現実に	8
9/7 バッター村を思い出す	8
9/5 週末ボランティアはキツイ	9
時ノ寿の森クラブ活動予定<10~12月>	別紙
社会的企業人材創出・インターンシップ事業プログラム	別紙

参加者募集

COP10 開催記念 自然観察会 「時ノ寿の森スタンプラリー」へのご案内

私たちは生物多様性からの恵みに支えられて生きています。たとえば、食べ物、木材、衣服や医薬品。さらに、私たちが生きるために必要な酸素は植物などによって作られ、汚れた水も微生物などによって浄化されています。生物多様性は、私たちの生活になくてはならないものなのです。今月 11 日から名古屋市を会場に、地球上から失われていく生物を守るための国際会議（COP10）が開かれます。COP10 開催を記念し、時ノ寿の森で自然観察会を行います。

生物多様性が残る「時ノ寿の森」を歩き、人間や植物、動物にとって豊かな森が大切であることを、体感してみてください。140 種類の樹木が育つ標高 350m の「時ノ寿の森」を、植物博士・吉野知明さんから樹木の名前や特徴を学びながら、森の秋を満喫します。お子様に豊かな森を見せてあげてください。ただいま、一般参加者も募集（広報かけがわ 10 月号に掲載）しておりますので、周囲の方へも、ぜひ参加をお勧めください！

と き：10月24日（日）

午前10時～正午

ところ：時ノ寿の森

定 員：100名（申込順）

* 電話で名前・参加人数

をご連絡ください。

持ち物：水筒、お弁当（自由）

時ノ寿の森に陶芸窯を造る！

みんなの力で小屋が建ったぞ！ さあ窯づくりだ！

時ノ寿の森から切り出した杉・檜を使い、10 数名の会員が記録的な残暑（9月4・5日）の中で、10坪の掘立小屋を建てました。いよいよ10月から耐火煉瓦で窯の組み立てが始まります。（別紙の活動予定表をご覧ください。）

この窯は、スギ・ヒノキの間伐材を燃料にします。陶芸家徳川ご夫妻に手ほどきを受けながら、世界に一つしかない「時ノ寿焼」を作りましょう。窯造りから参加できるなんて、二度とありませんよ。みなさんご参加下さい。



内閣府「地域社会雇用想像事業」

森林再生ビジネスの創出

インターンシップ事業始まる！

林業は、3Kの代表です。汚い・きつい・危険。この三要素の視点を少し変えてみると、土や風の匂いに包まれ、カラダと心の五感をフル回転させ、子どものように冒険心を駆り立てながら夢中になれる「夢とロマン」の仕事と思うのですが・・・。

今、世の中では、右を見ても左を見ても環境・環境・環境と叫ばれていますが、我が国にとって最も可能な、かつ多方面に効果のある環境貢献は国産材の活用であるのに、現実には、まったく国民総参加の機運になっていかない。

このたび、NPO法人時ノ寿の森クラブでは、この趣旨に共鳴する市民も募り、会員と一緒に林業が最高の職業観と思える体験を試みようと、10月2日から3ヶ月間のスケジュールで内閣府の事業を活用し、「森林再生ビジネスの創出」と銘打ったインターンシップ事業を始めます。（別紙プログラムをご覧ください。）

一般市民2名・クラブ会員8名の研修生の皆さんは、山仕事の基本の「き」を学び実践します。山が明るく再生されていく景色を前に、滴る汗をぬぐいながら充実感に浸っていただきます。

森を抜けて来る涼風が頬を撫でる感覚は、まさに「林業冥利」。
しかし、林業は、危険も隣り合わせていますので、絶対に事故を起こさないように、常に安全第一でお願いします。



山師から木の伐り方を学ぶ



クレーンで集材も実習(安全第一)

<最近の時ノ寿ホームページ・ブログより>

2010年10月3日(日)

林業はいのちを守る産業



きょうの毎日新聞の読者欄「みんなの広場」に、山形県庄内町で稲作を営む73歳の男性が、米価下落の中で「農業は人間が生きていく上で一番重要な基本産業です。今、すべての産業の原点としての農業を見直す時です。」と、農家がひたむきに国内の食糧生産を守っていることを、世の中の人々に分かってほしいと書かれていました。

林業もまさに同じことが言える状況下にある。植物生態学者の宮脇昭先生は、私たちのDNAを守るのは森林だとおっしゃっているが、実際に荒廃している「ふるさとの山」を目の前にすると、これでは小さな生物だけでなく、人間をはじめ多様な生物であっても困難である、と素人でも思ってしまう。

このような状況下にある森林を、自分たちの手で一から再生してみようと、またその再生活動が末永く持続して行くように、国内森林資源が活発に流通するための手掛かりを探ろうと、昨日から静岡県掛川市の時ノ寿の森クラブでは、社会実験「森林再生ビジネスの創出・インターンシップ」が始まった。

「林業は、人間がいのちを守っていくために一番大切な基本産業である。すべての産業の原点として林業を見直してもらいたい。」と、私も声を大にして社会に訴えたい。

2010年9月23日(木)

いのちの森づくり40年

私たちの「時ノ寿の森づくり」を本物の森づくりだ、とおっしゃってくださりご指導・ご支援をいただいている横浜国立大学名誉教授・宮脇昭先生が「いのちの森づくり」の大切さを説かれ、植樹活動を始められて40年を記念したシンポジウムが横浜であった。クラブ役員など会員6名で、先生のご功績を敬うとともに、私たち自身の森づくり活動への勇気



と元気をもらいに横浜に行ってきた。全国から、そして行政から企業・個人まで先生の哲学に感動した人たちが約600名集まった。

今から40年前、1970年と言えば日本では万博が開催され、まさに高度経済成長真っ盛り。その時代に、未来にいのちをつなげるために「木を植えよ」と世に発せられたのだ。先生自身もおっしゃっていたが、生態学の学者の説であっても、その行動に賛同する企業も個人もなかったであろう。

いまや、国内はもとより世界において、宮脇先生の名を知らないところはない。この40年間の地球環境の悪化の一方で、強い信念の下で進められた4000万本の植樹の実績は、紫綬褒章・ブループラネット賞などの受賞が証明している。

先生は、生態学上人間は、女は130歳・男は120歳まで生きられるから、まだ30年は木を植え続けるとおっしゃっている。今の地球環境の急速な悪化を見れば、先生は、これからが重要だと私たちに警鐘している、と痛感した。

「木を植えることは いのちを守ること 心に木を植えること」、愛する人の命を守るために、ふるさとの森に本物の木を植えて行きたい。そして、その森林が多くの人々によって利用されていく社会システムを構築したいと思う。

2010年9月16日(木)

木は夢の種だ



今夜は、徳島県上勝町を蘇らせた横石知二さんから多くのヒントと勇気をもらった。地域資源の「葉っぱ」を年商2億6千万円のビジネスに仕立て上げた裏には、「葉っぱ」に着目した素晴らしい気づきだけではなく、地域の一大産業に発展させるための並々ならぬ努力と勇気と情熱のほか、地域の人々を主役にさせてしまう天性的な演出力が横石さんにあったからだ、ということを感じるとともに、その可能性はどの地域や町にもあるということを感じさせられた。

「人は誰でも主役になれる」とおっしゃっていたが、70代、80代のおばあちゃんたちにパソコンを駆使させ、元来人間の持っている競争心をうまく引き出された感性はすごい。人間いきいきと生きていくには、歳を幾つとっても、いい意味の欲は持っていなければだめだということ、上勝町のおばあちゃんたちが証明してくれている。昨日1日の葉っぱ最高売り上げばあちゃんは、なんと6万2千円だそうだ。

時ノ寿の森の間伐材をこつこつ運んでは薪を作っている鉄ちゃんは、膝が痛いと言いながら山で作業する姿は輝いている。森林を舞台に、じいちゃんたちが主役の森林再生ビジネスを興したいと思う。まさに、今、私たちが植えている木は、未来の子どもたちに豊かな環境を贈る「夢の種」であると確信した。

2010年9月14日(火)

組織活性化に間伐材が一役

政界は、きょう民主党の党首選が行われ、菅首相が再選された。内外ともに山積する課題を前に、いよいよ首相のイニシアチブを発揮する時だ。先日もこのブログで指摘したところだが、国内に豊かに蓄えられた森林資源を国挙げて活用するための方策を、国民目線に立って検討してほしいものだ。

わが時ノ寿の森クラブは、森林再生を真剣に思う会員たちが集まり、間伐作業のほか間伐材の活用に取り組んでいるが、間伐材の活用は遅々と広まっていかない。そのような中で、JA遠州夢咲の企画部組織広報課の杉浦課長さんたちが、組織活性化を託した各地区の支部長表札製作を企画され、その表札素材を間伐材で作ってみてくれないかと相談を受けた。

うまくできるか不安であったが、7月からの製作作業も会員たちの創意工夫と尽力により、このたび無事完了し、先週200個を納品した。きょう、JAの杉浦課長さんが、出来上がった支部長表札を持って喜びの報告に訪れてくれた。

間伐材のヒノキの香りと輝きが、JA遠州夢咲の組織を活性化してくれることを心から祈りたい。



2010年9月12日(日)

北海道の会員より大地の恵み

残暑が猛烈な1日だった。時ノ寿も、炎天下は耐えがたい暑さだが、木陰の涼風は暑さを忘れさせてくれる。今日も、会員9人(男7・女4・子3)が森の駅の施設(薪小屋)建築工事に参加してくれた。

NPO法人になって現在会員は運営会員・サポーター会員合わせて122人が加入してくれている。この中には、時ノ寿に一度も訪れたことのない会員もいるが、我々の森林再生の活動に全国から熱いエールを送って



くれる会員が加入してくれている。森林再生はとてつもなく大きな目標であるので、これを推進していくためには、このような支援者が国内はもとより世界にも幅広くいることが大きな力となる。全国の皆さんに、元気な時ノ寿の様子をお伝えしなければ・・・。

一昨日、北海道斜里町で大規模な畑作農業を営む会員田中さんから、まさに北の大地の恵み「とうきび」(とうもろこし)を送って

くださったので、きょう時ノ寿の森で茹で、みんなでいただいた。とびきりの味が、残暑でもうろうとするカラダに元気をくれた。時ノ寿の森クラブガンバレ……。斜里の田中さんありがとう。

2010年9月9日(木)

外資による森林買収が現実

—昨日のNHK TV・クローズアップ現代で、日本の森林が外資によって買われていく事実を報道していた。心配していたことが、ついに現実となってしまった。このブログでも、1年以上前から外国資本による日本の森林買収の動きがあることを指摘してきたが、報道によれば、北海道内で



292haもの広大な森林が、中国・イギリス・ニュージーランド・オーストラリアの資本家の手によって買収されていたことが今になって分かったという。北海道庁では、この事実を重く受け止め、国土保全のための何らかの規制の必要性を訴えているそうだが、国土を保全していく機関とすれば、当然のことだろう。

日本のように森林の所有権や利用権が個人に保障されていても、その所有者が森林の公益的機能を理解していなかったら、国土は無法地帯となってしまい、所有者は不明となり、何も手をつけることができなくなってしまう。こうなったら、大変なことである。

以前から提案していたが、ナショナルトラスト方式による森林保全が必要な事態である。時ノ寿の森は、そのモデルである。

2010年9月7日(火)

バッテリー村を思い出す



時ノ寿の森が、みんなの力で蘇っていく。その実感は、私にとって感慨ひとしおである。生れ故郷が荒廃していく今から12年前の1998年の秋、岩手県山形村にある5戸18人という日本一小さい村を知り、この村こそ自分が目指すふるさと再生の原点だと思い、一人岩手県の山深い村を訪ねたことを思い出した。

この村は、バッテリー村と呼ぶ。バッテリーとは、沢のわずかな流水を活用して製穀

や製粉をする施設だが、先人が厳しい生活の中から生み出した知恵で、現代にも生きる省エネ傑作なのである。わずかな水で大きなエネルギーを発生するバッテリーこそ、この村の目標である和と創造、勤勉を象徴すると考え、村の名前を「バッテリー村」と命名したそうである。「この村は与えられた自然立地を生かし、この地の住むことに誇りを持ち、一人一芸何かをつくり、都会の後を追いか求めず、独自の生活文化を伝統の中から創造し、集落の共同と和の精神で生活を高めようとする村です。」が、この村の憲章である。

一晩泊めてもらい、山村に暮らす初老とは思えない、豊かな感性で村人を率いる木藤古徳一郎村長に惚れてしまった。そして、村に点在するいくつかの施設は、まさに自分が育った12軒の大沢集落に、かつて現存したものばかりだった。掛川に帰り、すぐに手掛けたのは、故郷にかろうじて残る茶部屋の改修工事であった。私のふるさと再生の原点は、この辺にあるであろう。妻と二人で始めた活動も、今は大勢の人の共鳴と支援をいただけている。今後は、クラブ会員の創意と工夫を結集し、時ノ寿固有の価値を活かした創造の森を造っていきたい。

P.S. 興味のある方はインターネットで「バッテリー村」を検索されたし。

2010年9月5日(日)

週末ボランティアはキツイ



今日も猛烈な残暑の1日だった。昨日に引き続き、会員10人が薪窯の小屋建築作業に駆けつけてくれた。時ノ寿の森クラブ会員は、みんな個々にいろいろな活動をしている方が多く、週末にはそれぞれに予定があるにもかかわらず、時ノ寿の森クラブの活動に自らの意志で集まってくれた。本当にありがたい。

このような感謝の気持ちとは裏腹に、今日の活動はボランティアの域を超え、参加者から悲鳴が上がるほど目いっぱいの活動を要求してしまった。参加者は、こんなにボランティアを酷使するリーダーは初めてだと、お思いかもしれないが、それほど森林再生はまったなしの状況にある。

今日も、日本各地で9月の猛暑の記録を塗り替えるような猛暑に見舞われたようだが、もはや地球温暖化による炎暑の夏は避けることが出来ないのかもしれない。そんな状況の中で、ゆったりと森林再生を進めていくわけにはいかないのだ。

NPO法人時ノ寿の森クラブは、このような地球危機的な状況を憂い、本気の地球温暖化抑制活動をしていく。会員の皆様の気持ちをもっと理解せよという意見もあると思うが、今しばらくがむしゃらな代表に付いてきてほしい。